

# 教 仏 庵 草

第211号  
(発行日)

2008年1月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月2日と

12日。午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

# 宿業深き身

私は無類の寒がりなので、一月、二月は特に苦手である。暖房器具のそばを離れることが苦痛で、家に居るときは電気ストーブやこたつにべったりである。

電気エネルギーを消費することは炭酸ガスを排出するのであるから、私などは人一倍炭酸ガスを出す生活をしているのである。炭酸ガスは地球の温暖化を招いて、洪水を発生させたり、生態系を破壊し、また雪水に頼っている人々の生活を脅かしたりする。こうした人たちは生活が出来なくなると、他の地域に移動しなければならず、それがまた地域紛争の種になる可能性がある。

炭酸ガスをふやすことは地球環境を悪化させ、人類や生物に害を与えているのだから、私もその罪をまぬがれない。

エコ生活をせよといわれても、寒さを辛抱するのは勘弁して欲しいという思いであ

る。省エネの寒さに耐えねばならぬエコ生活などはとても自分にはできそうもない。道歌に

「世をすてて 身はなきものと 思えども 雪のふる日は寒くこそあれ」

とある。これは仏道修行者の歌で、世を捨て身を捨てて、暑い寒いにはとらわれないという仏道に入ったのであるが、やはり雪の降る日は寒いものであるという、理想と身の実とのギャップを歌ったものと読める。

ことは暖房だけではない。門信徒へのお参りもそうである。一年前までは結構遠くまで自転車でお参りしていたが、一年ほど前から、坊守の運転する車に乗ることが多くなった。自転車はエコであるが、自動車は排気ガスを出す。かといって老体には一度自動車に乗るとやはり体が楽であるから、遠いところはもう自転車には乗る気がしない。理想や観念上では、エコ生

活は願わしいが、しかしそういう生活が実際にできるかというところ、私のような辛抱心のないものにはできそうもない。こんな寒がりの身を受けた者は寒い日は耐えられず、どうしても暖房に走ってしまうのである。

寒さに弱い体をもつ自分の業の深さを感じるのであるが、それは寒さだけではない。人間の身をもっているということは、苦を避けて快適に傾き、身を守り安楽でありたいという欲求にどうしてもしたがってしまう。

人生で苦しいのは病氣と貧困といわれるが、それもこの身をもつがゆえの苦しみといっている。

人の身を生きねばならぬことの悲しみや浅ましきを感じつつ、しかもこうしか生きられない我が身である。この身に「我が名を称えよ」の道一

つが与えられている。この弥陀の本願を信じ念仏申しつとさせていただいて、やがて仏に成って世の罪濁を永劫かけて浄化していく、そういう本願念仏の道より外に、私は道はない。

それは本願に甘えているのではないかと責められても、弁解はできない。ただどうか生きられない宿業の身である。

だから、この世のいのちが終わり、この身を捨てられることは有難いことである。釈尊が悟りを開かれたとき、「もはや後有を受けず」といわれたのは、喜びの言葉である。もう二度とこの世の後に有(身)をもたない、いわば涅槃するという喜びである。浄土に生まれるという大いなる涅槃こそ願わしいものである。(了)

# 謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 土井眞由実

山下清人 中村憲二

迫田忠夫 中村穂積

平成二十年元旦

# 真宗問答(四十二)

## 浄土荘嚴の修行

かの比丘、その仏の所、諸天・魔・龍神八部、大衆の中に、この弘誓を發し、この願を建ておわりて、一向に志をもつばらにして、妙土を荘嚴す。

(『仏説無量寿經』より)

(現代語訳) 法蔵菩薩は世自在王仏のおそばにあり、さまざまな天人・魔王・梵天・竜などの八部衆、その他大勢のものの中で、この誓いを立てたのである。そしてこの願を立ておわって、国土をうるわしくとのえることにひたすら励んだ)

(語句)

諸天―神々  
魔―善をなすのをさまたげるもの  
龍神八部―仏法を守護する諸神。  
妙土を荘嚴す―浄土の徳を顕現する。

\*

うことです。かざることによって、そのもの価値をあらわすことです。たとえていえば、お内仏に花をかざった

り、打敷をかけたたり、灯明をともしたり、掃除をしたり、仏具を磨いたりすることをへおかざりする」と申します。なぜおかざりするかといえ

ば、お内仏の中心であるご本尊の阿弥陀仏の徳を表わすためです。どんなによく描かれた阿弥陀仏の絵像であつても、その絵像が汚れた壁の釘につり下げただけでは、その阿弥陀仏を見て、へああ有難い」と拝む気にはなかなかありません。それは阿弥陀

仏の有難いお心が見る人の心に伝わらないからです。いわば阿弥陀仏の徳が外に顕現してこないからです。だから金箔のお仏壇に安置し、花をかざり、灯明をともし、磨かれた仏具を置き、お香をたくという、いわゆるおかざりをする

ると、仏の絵像を仰いで尊い思いが起こり、手も合わされてくるのです。それをへお内仏を荘嚴する」といいます。そのようにおかざりをするこ

の値打ちなり価値を、引き立てる、あるいは外に表す、顕現することができのです」  
A 「荘嚴する」という意味はわかりました。では浄土をなぞ荘嚴するのですか」

D 「それは、浄土を荘嚴することによって私たちが浄土のありがたい徳を聞き、それによって私たちが浄土に生まれるたいと願ひ、浄土に生まれる法を聞かせんがためです」

\*

A 「妙土(浄土)を荘嚴するといわれるのは、すでに浄土があるうえにそれを荘嚴するということなのでしょうか」  
D 「この点は、私の聞かせて

いただいたことからは申しません、浄土として衆生にあらわれる功德は(本来ある功德)といわれています。しかし、その功德が衆生に顕現しないかぎりには衆生に知られず、衆生がその功德にあずかることはできません。ですからその功德を衆生に与えんがために、法蔵菩薩は願を起こし修行されて、衆生を生まれしめる浄土として現し、浄土の徳を衆生に与えようとされたのだとお聞きしています」

A 「浄土の本来の功德というのはどういふものですか」

D 「それは法性法身といわれていますが、無量寿經の四十八願の中では、光明無量、寿命無量の願として説かれています」

A 「光明無量・寿命無量とはなんですか」  
D 「光はかりなく、いのちはかりない働きそのものといわれ、私どもの思議のおよばないゆえ、こころも言葉もたえ

た無量の功德といわれています」  
A 「光といのちはかりなき働きといわれているのですか」  
D 「ええそうです。これがすべての存在の本質であり、世界の

本質であり、ありのままのすがたである、とお聞きしています」  
A 「そうすると私たちも当然この中にいるのですか」  
D 「そういっていいと思いません。ただ私たちは無量のひかりの中にありながら自らの迷

妄の心によって、虚構の闇を生み出し、その中に閉塞されているのです。いわば自縛されているのです。それが生死流転の迷いの姿であつて、闇と苦悩の領域を現出させているのです」  
A 「本来、私たちは光かぎりない世界の中

ね。ただそれを見失って煩惱をもやし苦悩し続けているのですね」

D 「そういいればいいと思いません。昨年亡くなられた哲学者の池田晶子さんがドイツにいた世界的に有名な哲学者である一〇一歳のガダマー氏の処を訪れ、〈存在とは〉と彼に尋ねたら、〈光〉との答えを得たといいますが、存在とはいのちということでしょうが、それはそのまま光という意味をもつということでしょうね。そして池田さんに〈死の後に何が来るかということ〉が、私の大いなる疑問です」と彼は語っています。私たちはこの問題を避けていますが、これも大きな問題です」

A 「私たちはすでに光のなかにあるにもかかわらず、それを知らないで闇から闇に流転しているのですね」

D 「そうなのでしよう。それで法蔵菩薩はその光はかりなくいのちはかりない無量の徳を顕現し、それを浄土として私たちに現し、その浄土に生まれることを私たちにうながし、浄土に生まれる因まで成就して私たちに与えようとするのです」

A 「そういう本来ある無量の功德（ひかりといのち）を私たちに顕現し与えようとされて、法蔵菩薩は本願を建て、浄土（妙土）を莊嚴する修行をされたのですね」

D 「そうお聞かせください。います。ですから、法蔵菩薩はもともとある無量の功德によつて、願を建て行を起し、それを成就して、衆生の救済を成就されたのです。もし、なにもないところから功德を生み出すというのなら、それはおぼつかないともいえません。法蔵菩薩の願行とその結果が確実に間違いないのは、世界が本来そういう無量の功德の中にあるからでしょう。はじめに真実があるから、真実に迷っているものも、やがて真実にであつて助かるのです」

A 「真実はあつても、私たちがそれを知らねば、あるいは知つてもそれを受け取らねば私たちが救われませんね。その真実を私たちに知らせ、その真実を私たちに与えるべく、本願を發し修行をされたのが法蔵菩薩なのです。では法蔵菩薩はどこからきた方ですか」

D 「法蔵菩薩は、先ほどの光

はかりなくいのちはかりない領域から出現された菩薩といえましよう。聖人は

弥陀成仏のこのかたは  
いまに十劫とときたれど  
塵点久遠劫よりも

ひさしき仏とみえたまう

ともうされ、聖人は、法蔵菩薩は修行して初めて阿弥陀仏になられたように説かれていますが、もと久遠の仏であつたと領解されておられるのでしよう」

## 雑記帳

死とは動く肉体が動かなくなることであるが、それは肉体の機能が動かなくなるのであつて、肉体としての物質それ自身が動かなくなるのでも無くなるのでもない。分子や原子の物質的現象は動きづめである。肉体は分子の集合体で、死ぬとやがて分子の結合体は分解して分子が分散するのである。だから火葬すると肉体は「死んでなくなつた」のではなく、分子活動の変化によつて「人の形」から変形し骨と灰などに形を変えたのである。薪を焼くと薪が無くなつて無になるのではなく、薪という形が灰などの形に変化したのである。

「存在するもので無くなるものはない」というのが、自然界の法則であり、質量保存の法則というのはそのことであろう。そのように存在（有）は有から生まれ、有へと変換し続けている。物質は様々な形を変えながら変換し続けているから無い。

心も存在である。心は同じ存在でも物質的存在とはまったく異質な存在であるが、物質的存在が変化し続けて無くならないように、心という存在も変化し続けて無くならないのではなからうか。人の形として心はどこから生まれたか、それはとても分からないにしても、心は無から生まれることはない筈である。心は心から生まれた、もう一つ言えば心は心として変化し続けて今の私の心になっているのではないか。心も変化し続けていて無くならないのではないか。物質活動・分子活動として人の肉体の形を取つたように、人間の心は人間という形をとつた心であるといえよう。馬の心という形をとつた心とか、蛇の心という形をとつた心もあるのではないか。

人間の心は人間として誕生した時点から初めて生まれたとよくいわれるが、そうであろうか。少なくとも無から生まれるはずはない。有は有から生まれる。もしも、「無」から有が生まれるなら、その「無」

はもはや無ではないではないか。また、もし人間の心は脳（ニューロンシステム）から生まれたとするなら、脳という物質から心が生まれたことを見る。世界のどこを見ても物質から生まれるのは物質であつて、脳という物質から心が生まれたということは未だ一度も確かな検証はなされてない。そう推測しているだけである。ただ脳と心は関係があるとはいえよう。

物質と心とは非常に異質なものである。たとえば物質には重さもあり、色もあり、形もある。しかし心にはそういうものは無いのではないか。また脳や身体は老化するが心は老化しないのではないか。ワイルダー・ペンフィールド（高名な脳科学者）も「心には老化という現象は見られない。人生の晩年に至るまで、心は独自の願望の成就に向かつて進み続ける。そして、心がより明らかな理解と、より平衡のとれた判断に達しつ

ある時に、身体と脳はすでに力やスピードを失いつつあるのだ」と言っている。ただ記憶は神経細胞の束に信号として保存されているとも言われているが、これも諸説ある。脳が老化することによつて記憶能力が衰えるのはこのためであつて、心そのものの老化ではないといえる。

（了）

# 信心夜話

ある人尋ねて云く、「何ほど聞いても愚図々々しています、一言聞きかせておくれ」

お園同行、答えて曰く、「お前様も愚図か、わたしも愚図々々ぢや。けれどもその愚図のまま来いよと仰せられたら、まんざら嫌気もないでしよう」

問、「それでも信心肝要と仰せられるが、その信心がいつ得られたやらわかりませぬもの」

答、「信を得ると云うは、ハイと云うまでのことでありますげな」

〔信者めぐり〕より  
\*  
仏教の教えを聞いて、教えを生活に生かそうとか、あるいは役立てようとかするが、なかなかそうはいかないのである。たとえば、「私たちは自分の力で生きていると思っているが、実は天地自然の恵みとか両親の養育とか先生方からの教育とか、そういうさまざまな因縁によって生かされているのである」と聞いて、「そうなんだ。自分はいろいろなもののおかげによって生かされていたのだ」と知らされる。そう知らされることは結構なことなのであるが、いつの間にかまた「自分の力で生きている」という感覚で生活して

しまっている。あるいは「人間を学歴や地位や職業や家柄などの違いで差別してはいけない。人間はみな本来平等なのだ」と聞いて、「確かにそうだ。これからは人を平等に見なければいけない」と思う。しかし聞いたその時はそう思うのであるが、さて人を平等に見るような生活が出来ていくかという、いつまでたってもそうなるかという私がいるのである。

こうした教えは尊いのであり、それが説かれることも大事であるが、他者はともかく、そういう教えの通りの自分になっているのかというと、あいも変わらぬ私が残ってしまうのである。

なぜかといえ、それは煩惱が具足して、教えられなくても煩惱だけは身につけてしまっているからである。正しい道理を聞いてそうだと思うのであるが、それが身につかないのは、煩惱が具足して、煩惱が私の心の性質にまでなっているからである。

そういう壁にぶつからず、いつかは教えの通りの人間になれると思っていづまでも未来に期待したままで月日をおくるか、あるいは教えを聞いても真剣に聞いておらず、聞いてもその場かぎりで、〈今日はいいい話を聞かせてもらった〉という一時の感動だけで終わり、またもとの日常生活に帰ってしまう。

さて、お園同行に「どれほど聞いて

もぐずぐずしています」とこの人がいわれたのは、広い意味で言えば以上のような問題にかかわるであろう。ただここでは直接的には「真宗の聞法を重ねていますが、どれほど聞かせていただいてもすつきりといただけません。いつまでたってもやもやしてはつきりといただけません。一言お聞かせ下さい」という問いであったであろう。いわゆる、真宗の教えをいくら聞いても、教えの通りに信心決定の身にならず、いつまでもぐずぐずしている自分であることを問題にしているのである。

それにたいしてお園同行は、それはダメだ、もつと聞法して信心をいだきなさいとは仰せられず、「お前さんもそうか私も同じだ。そんなぐずぐずする心だから、阿弥陀様はすでにその心はお見抜きの上で、〈そのまま来いよ。そのままなりを引き受ける〉と仰せくださっているではないですか」と答えられた。ぐずぐずする、そんな心ですつきりさせよと仰せられる阿弥陀様ではない。煩惱具足の凡夫と知り抜いて、助かる因は阿弥陀仏の方で全て仕上げ、〈いつまでたつてもそんな心の汝なればこそ、この阿弥陀が助ける〉と、南無阿弥陀仏と喚んでおられる。だから〈愚図のまま来いよ〉と仰せ下さる阿弥陀様であると、お園さんは一言申されたのである。

しかし、この広大な大悲のお心をこ

の人は聞いても、それをすつと素直に聞かず、なお自分の心に〈それでもやっぱり信心がなければダメでないか〉という、いわば聞いてきた真宗教義の言葉に封じられて、お園さんの大変な難い言葉をそのまま素直に受け取れないのである。だからさらに、「それでも信心肝要と仰せられる。私にはその信心が得られたとは思えない。だからあきません」と重ねて云っている。そうするとお園さんが「信を得るといっても、この仰せにハイと云うばかり」と、我が機の姿にどこまでもこだわること、お園同行に、阿弥陀様が「丸々助ける、引き受ける」とまで仰せ下さる大悲の仰せを、そのままハイと聞くばかりであると、お園同行は親切に申されるのである。如来の仰せの前には教義も何もない、大悲の光をあびるばかりである。我が心、我が機、我が領解は一切、「無有出離之縁」と決定されている。いわば私の心はどことらえても全く助からぬ人間である。

南無阿弥陀仏はそんな〈助からぬ者を助ける〉大悲にたましますゆえ、私の心がどれほどぐずぐずしておろうが、それは阿弥陀様の勘定済みである。だからハイとそのままいたたきなさい、とお園同行は仰せられたのである。

(了)